

■連載

遠野のわらべうたに学ぶ(最終回)

赤ちゃんのころと

からだを育む語りかけ

「正面」「正中線」の
もうひとつの意味とは

木津陽子



遠野のわらべうたの伝承者・
阿部やエさんと木津さん(右)

「木津さんは、どちらの出身ですか？」と聞かれることがよくあります。

岩手県遠野に伝わるわらべうたを、その地に住んだことのない私がなぜ伝えているのか不思議に思われているからでしょう。よく考えてみれば自分でも不思議ですが、初めて遠野のわらべうたを知った時、別の地域のものとは感じず、日本の大切な宝だと感じたのです。歌詞自体はその地域独特の言い回しだったりするのですがその唄の背景にある人としての生きる知恵や感覚が日本人らしく思ったからです。遠野のわらべうたは生まれてすぐから、十三歳(数え年)までありますが、今特に教えてほしいと求められるのは、生まれてから一歳ぐらいまでの乳児のわらべうたです。まだ言葉を話さない赤ちゃんにどう語りかけたらいのか、どうやって遊んだらいいのか、そのヒントになればと私自身も学びながら、伝えていきます。

生まれてすぐの赤ちゃんはとても疲れていて寝ることが一番ですが、お腹も満たされ、おむつもかえてまだ機嫌よく目をあけている時があれば、「正面」から

「んこー」といって声をかけます。赤ちゃんは目はまだはつきりとしませんが耳はよく聞こえています。大人のちよつと高めで優しい言葉の繰り返しで赤ちゃんは安心してゆつくり休むことができます。そして毎日「正面」から赤ちゃんに声かけていると赤ちゃんは次第に「正面」を向くようになり、そのうちに「んこー」と返事をしてくれるようになります。やがて赤ちゃんの方から人を求めて声を出すようになります。生まれた時は疲れて不安だった赤ちゃんが、大人の声を聞くことで安心して人に向き合うようになってきます。生後三ヶ月頃になって赤ちゃんが目で人の動きを追うようになったら、「てんこてんこ」の遊びで語りかけます。赤ちゃんの「正面」で、大人が自分の顔のそばで、でんでん太鼓をふるるときのように手首を内側に内にと三回返しながら、「てんこてんこてんこ」といって見せる遊びです。

次に大人があやして笑うようになったら、「にぎにぎにぎ」といいながら右手を握ったり開いたりする動作を見せて見せます。それから、首が座った頃「かんぶかんぶかんぶ」といいながら大人が頭を横にふって見

せます。そしてお座りができるようになったら、腰を丈夫にする「手打ち手打ち手打ち」の遊び、恥ずかしいという意味の「ちよつちよつちよつ」の遊び、美味しい気持ちを表す「頭なりなりなり」の遊び、嬉しい気持ちを表す「ばんざあい」の遊びというふうに生まれてから一年のあいだに、赤ちゃんの体と心の発達に合わせて語りかけて遊んでやります。赤ちゃんの遊びは、全て「真似っこ」を促すだけで強制的にやらせることはなくて、赤ちゃん自身が心を動かす、体を動かす遊びです。「赤ちゃんは大人にやってもらっているだけでは育たない、赤ちゃん自身が頑張ることが大切なんですよ」とヤエさんはよくおっしゃっていました。そしてどの唄にも子どもの育ちに合わせた目的があり、真似る力や、人の見方、感情表現、意思を出す力など人として大切な生きる力の元をおこしていきます。

こどもと遊ぶ時は、必ず「正面」から目と目を合わせて遊ぶことが大切だとヤエさんは繰り返しお話しされました。「正面」とは、もちろん空間的位置としての正面のことですが、人に向き合う時の心構えとしての正面であり、人には、まっすぐ向き合うものという

意味でもありません。

遠野のわらべうたを自分の子育てにだけ活かすのではなく、人にも伝えたいと思い、十年ほど前保育士の資格をとるために試験を受けました。その試験で毎年必ず出題されるのが、糸賀一雄先生のことです。糸賀先生は、戦後混乱期の被災孤児や知的障害者のための「近江学園」や重症心身障害児施設「びわこ学園」を創設した「日本の障害者福祉の父」と呼ばれて多大な業績を残された先生です。その糸賀先生が生前お話しされていたと最近知ったことですが、人の体の発達にとって、とても大切な「正中線」のもう一つの意味として、「生き方の中心・軸」をあげられていたそうです。ヤエさんの伝えてこられた「正面」ととても重なり、この話を知った時、心がふるえる思いがしました。

私自身も経験や知識は乏しく、子育てに迷い悩んだ経験があるので、今現在子育て中のお母さん方の不安な気持ちは、痛いほど伝わってきます。子どもの事を大切に思うからこそ、たくさんある情報に振り回され、不安になっている事もあるでしょう。そんな時こそ大切なのが、目の前にいる子どもの「正面」に立

ち、目と目を合わせて向き合い、言葉を交わしながら、自分の考えを持ち、判断して自分で行動することであり、自分の生き方である「正中線」を見つけていくことが大事なんだよと、ヤエさんも糸賀先生もおっしゃっているのではないかと最近強く思うようになりました。

五回にわたり「遠野のわらべうたに学ぶ」を連載する機会をいただき、私自身振り返って学び直すことができ、とても感謝しています。この学びは、「これで終わり」ということはなく、一生続く学びです。

人と「正面」で向き合って、自分自身の「正中線」を大切にしながら、これからも「人を育てる唄」としてのわらべうたを伝えていきたいと思っています。読んでくださってありがとうございます。

きつ・ようこ

京都市出身。臨床検査技師・保育士。長男の夜泣きに悩む中、わらべうたに出会う。特に若手県遠野のわらべうたに子育てのヒントがあるとの思いから、遠野のわらべうたの伝承者阿部ヤエ氏のもとに約十五年通い指導を受ける。現在、流山市かやの木保育園、わらしこ保育園の子育て支援センター、都内世田谷区のおでかけひろばぶりっじなどで講座開催中。